

Sibshop ファシリテーターに求められる資質とは

—ファシリテータートレーニングの実際から—

阿部美穂子

とやま発達福祉学年報 第4巻 抜刷

平成25年5月

Sibshop ファシリテーターに求められる資質とは

—ファシリテータートレーニングの実際から—

阿部美穂子

Research on the Qualities of Sibshop facilitator

— Based on Sibshop Facilitator Trainings —

Mihoko ABE

障害のある子どものきょうだいの支援活動においては、その中心となるファシリテーターが必要であり、ファシリテーターが果たす役割とその資質が検討される必要がある。欧米を中心に公的なきょうだい支援事業に取り入れられているSibshopは、ファシリテータートレーニングが確立しており、欧米各地でファシリテーターの養成が実施されている。そこで、米国にてファシリテータートレーニングワークショップを体験調査するとともに、実際に地域で行われているSibshopの事例について取材し、ファシリテーターの果たす役割と求められる資質について検討した。その結果、Sibshopファシリテーターに求められる3つの役割と6つの資質が考察された。また、今後、欧米とは異なる日本の特性に応じたSibshopプログラム開発やファシリテーターの在り方を検討していく必要性が示唆された。

キーワード：きょうだい シブショップ ファシリテータートレーニング 障害のある子ども 家族支援
Key words : Siblings, Sibshop, Facilitator Trainings, Children with special needs, Family support

I. はじめに

障害のある子どもの兄弟姉妹（以下、きょうだい）は、その成長の過程で多岐にわたる課題に直面することが指摘されてきており（平川 2004、川上 2009、阿部・神名 2011、他）、心理的な適応や行動上の問題、社会参加や、障害のある子ども（以下、同胞）との将来にわたる長期的かかわりや親の理解など、多様な側面から支援の体制やその内容が検討されつつある。きょうだいに対する支援プログラムの開発やその支援体制づくりがまだ不十分である日本の現状に対し、欧米ではすでにきょうだい支援は公的事業として位置付けられ、地域の障害児・者支援センター等で組織的に実施されている。中でも、きょうだいへの心理社会的支援の代表的な支援プログラムの一つに、Meyer & Vadasy (2008) が開発したSibshopがある。このSibshopはアメリカ合衆国ワシントン州シアトルを拠点に、アメリカ合衆国とカナダの各都市をはじめとして世界各国

で展開されており、Meyerらが主催するThe Sibling Support ProjectのHPによれば、2013年3月の時点で、400を超える実践登録がなされているとのことである。

Sibshopは、きょうだい自身が主役となって楽しむ集団活動として設定され、ゲームや製作、運動などのレクリエーションを軸として仲間意識を育て、きょうだいの日ごろの悩みやストレス、不安などをきょうだい同士で話し合うことで軽減し、心理的適応性を高め、エンパワメントを図るものである。国内でもきょうだい支援の活動の中で取り入れられ、その効果が確認されている（平山・井上・小田 2003、井上・平山・小田 2003）。Sibshopの実施にあたってはワークショップ形式のセミナーに参加してトレーニングを受けたファシリテーターがキーパーソンとなる。ファシリテーターは、保護者と面接してニーズを把握し、参加者グループを決定し、参加者の課題を統合してプログラムの内容を企画立案し、実際の展開をリードする。きょうだい支援活動において、このようなファシリテーターの存在は、

重要な要因である。吉川・白鳥・諏方・井上・有馬（2009）は、きょうだい支援を担うきょうだい当事者、あるいはきょうだい以外のファシリテーター養成の必要性に触れ、支援プログラム運営のファシリテーターに求められる条件と資質として、きょうだいがもちうる悩みや得がたい経験についての知識があること、グループワーカーとしての資質があることを指摘している。

それでは、実際の Sibshop ファシリテータートレーニングでは、どのようにファシリテーターを養成しているのだろうか。そのトレーニングプログラムでは、ファシリテーターとしてのどのような資質を高めることを目指しているのだろうか。きょうだい支援の先進国において支援プログラムの集大成（西村 2004）とされる Sibshop におけるファシリテーター養成のノウハウは、我が国においても、今後のきょうだい支援プログラムの開発と支援体制組織化のためのヒントとなるはずである。そこで、筆者はアメリカ合衆国で実施された Sibshop ファシリテータートレーニングのワークショップに参加してその養成プログラムを体験するとともに、Sibshop を実施している大学を訪問し、ファシリテーターの養成方法と実際のプログラムの企画実施における役割について情報収集を行った。本稿では、その内容について報告し、きょうだい支援プログラムの実践におけるファシリテーターの役割とそれを果たすために必要な資質について考察する。

II. 調査方法

1. 調査対象

(1) Sibling Workshops and Sibshop Facilitator Trainings

今回参加したファシリテータートレーニングワークショップは、The Resource Center of Chautauqua County が Sibshop の開発者である Don Meyer 氏を講師に招へいして主催したものである。本リソースセンターは、ニューヨーク州ジェームズタウンにある、障害のある人々や経済的、社会的弱者と言われる人々とその家族に対するサービス全般を提供している組織であり、自立に向けた支援、地域参加、生涯にわたる発達と QOL の向上をサービスの目的としている。支援対象は、乳幼児から高齢者にわたり、支援分野も心身の健康に関すること、生活支援、就労支援等、幅広い。中でもきょうだい支援は、子供向けサービスの 1 つとして位置付けられており、Director の Tess Kersner 氏が中心となって、複数のファシリテーターとともに Sibshop を実施している。ファシリテーターには、養

成トレーニングを受けたセンター職員と子どものときに Sibshop に参加し、大人になってスタッフとなったきょうだい自身が含まれる。

(2) Western New York Sibshop

ニューヨーク州バッファローにある、Canisius 大学において地域貢献活動の一環として実施される Sibshop で、心理学研究室の Susan K. Putnam 教授が Director として主催している。ファシリテーターには、教授自身の他に臨床心理学を学ぶ院生が含まれる。

2. 調査方法

Sibling Workshops and Sibshop Facilitator Trainings については、直接参加観察した。Western New York Sibshop については、主催者を訪問し、インタビューを実施した。いずれも得られた内容を筆記と画像で記録、分析した。併せて、提供された資料の翻訳と分析を行った。

3. 調査期間

2013 年 3 月 8 日～ 11 日

III. 調査内容

1. Sibling Workshops and Sibshop Facilitator Trainings の概要

(1) 全体構成

ワークショップは 2 日間で構成され、1 日目の前半は、きょうだいがこれまで経験してきた、さらに現在直面している状況について、参加者による意見交換、及びきょうだい当事者のパネルディスカッションから学んだ。後半では、Sibshop の目的と良い Sibshop とはどのようなものかについて講義がなされ、続いて今後自らの地域で Sibshop を企画、実践するために必要な準備事項について、具体的事例を基に学んだ。2 日目は、実際に地域の小学生きょうだいたちが集まり、講師である Meyer 氏によるライブデモンストレーションが行われた。トレーニングの参加者もその場で一緒に活動し、ファシリテーターとしてのプログラムの内容構成、きょうだいへのかかわり方、及び活動展開の方法の具体を学んだ。デモンストレーション後、質疑応答があり、最後は参加者に対する修了証の授与が行われた。

(2) セッションの内容①

1 日目の最初のセッションでは、きょうだいに見られる特有の「気がかり・心配事 = concerns」ときょうだいであるからこそ得られる「可能性、機会 =

opportunities」について、参加者がどのようにこれまでの支援経験から考えるか、キーワードを挙げて自由に発言した。さらに心理士、研究者、きょうだい当事者など、多様なメンバーが加わり、視点を広げてディスカッションを展開した。図1, 2は参加者から出たキーワードを司会者がまとめたものである。このセッションでは、参加者がきょうだいの直面する事実について、なるべく多様で多角的な観点から意見を出し、共有することが求められた。個々の参加者は、具体的な事実を挙げてキーワードを裏付けながら討論を展開した。キーワードによっては「良い」「悪い」と一極

的な判断はできず、両価的である場合もあり、きょうだいであることの、他にはない可能性を拓げていく観点の重要性が確認された。

(3) セッションの内容②

1日目の第2セッションでは、10代から50代までの当該地域に在住している7人のきょうだいによるパネルディスカッションが行われた。先のセッションでは、どのきょうだいにも考えられる concerns and opportunities であったものが、今度は現実によろしくきょうだいに起こっているのか、個々のケースが当事者から語られた。きょうだいであることで「よかったこと・そんなによくなかったこと・どちらにも考えられること」「同胞の障害が診断された時の思い」「これまで受けた支援や現在の支援で有効な内容」「親との関係性」「きょうだいであるからこそ学べたこと」などについて、講師の司会で各パネリストが意見を述べた。年代と育ってきた背景やきょうだい自身を取り巻く環境、家族の状況、同胞の障害の状況などから、それぞれのきょうだいがユニークな体験とそれに対する感情をもち、意味づけをしていることが明らかにされた。

(4) セッションの内容③

1日目の第3セッションでは、講師から Sibshop の目的と適切な進め方のモデルについて説明された。Meyer氏によれば、Sibshopの目的とは、①同じ立場の他のきょうだいと出会うこと、②きょうだい同士で、喜びや心配事について話し合うこと（特に喜びを焦点を置くこと）、③悩みや問題を他のきょうだいがどのように解決しているか知ること、④きょうだいが、各分野の専門家などから、同胞の状態や将来についていろいろな情報を得て学ぶこと、⑤親やその他の専門家たちに、きょうだいが直面している心配事や可能性について学ぶ機会を提供することである。また、1クラスの人数は12～20人ぐらいが適切であり、年間5回～10回ぐらいのセッションが、月1回のペースで行われるのが一般的である。Sibshopの運営で最も重要なことは、参加したきょうだいたちが、参加してよかった、これからも参加したいと思えるような子どもに親しみやすい活動を展開することであり（Meyer 2012）、良い Sibshop とは、きょうだいが良い聞き手のそばで十分話せたという体験ができること、十分楽しめる活動が準備されていること、身体を十分動かして程良く疲れを感じ、その結果家で良く眠れるようになること、不安を煽られるようなものではないことがポイントであると、説明がなされた。

その後、地域で Sibshop を始めるために、ファシリ

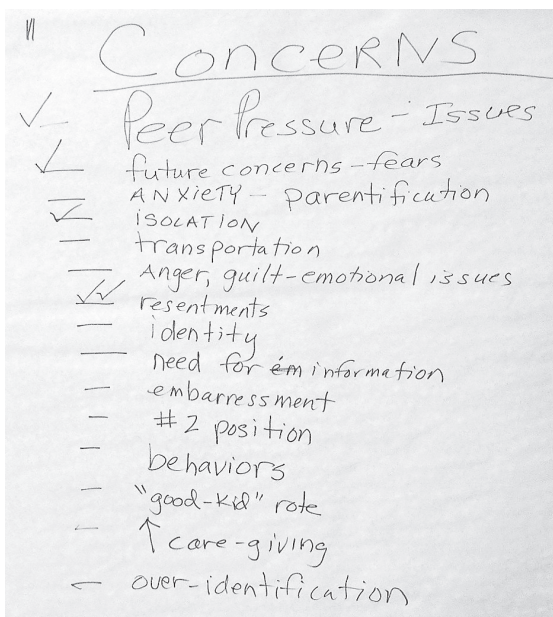


図1 参加者による気がかり・心配事のキーワード (Meyer氏の許可を得て、筆者撮影)

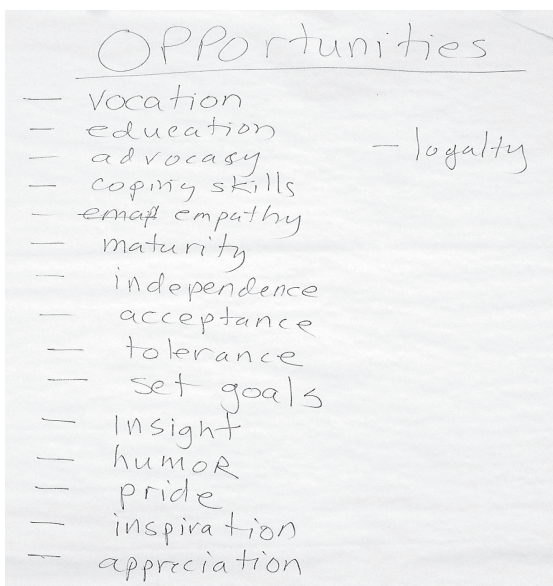


図2 参加者による可能性・機会のキーワード (Meyer氏の許可を得て、筆者撮影)

テーターが計画、実行することについて、当該リソースセンターにおける Sibshop の主務者である Kersner 氏が、講師の Meyer 氏の質問に応える形で具体例を紹介した。参加者は、ファシリテーターとして、活動場所の選定やスタッフの人選の仕方、資金の集め方、参加者の募集方法、他機関との連携の仕方について情報を得た。Kersner 氏からは、子どもが喜んで集まれる場所を選ぶことや地域の規模に応じた募集人数や開催回数を考えること、費用を提供するスポンサーとの関係で、参加対象の範囲や活動の目的が決まる場合があること等、現実的な運営ポイントが示された。

さらにその後、講師のリードできょうだいに提供する活動例を体験し、活動のねらいや内容の選定、実施計画の立案方法について、基礎的なフォームを確認した。

(5) セッションの内容④

2日目の第1セッションには、地域の8歳～13歳のきょうだい10数名が来場し、トレーニングの参加者は、講師のファシリテートによる Sibshop ライブデモンストレーションを体験した。午前11時半～午後4時まで、昼食を含む4時間半にわたるセッションであったが、きょうだいたちは夢中になって活動し、終了を告げられると「帰りたくない」と口々に主張した。

セッションではまず、集まった者から挨拶し、バイキング方式の食事を取った。いつもは食事の提供はないが、今回は特別プログラムということで、子どもが好むピザやフルーツが用意された。ファシリテーターは、子どもに近づいて雑談しながら一緒に食事をし、リラックスした雰囲気づくりに配慮していた。食事後、自分の簡単な似顔絵と名前を大型シールに書き込んで、名札を作った。その後、関係作りのためのゲーム、感情や考えを表出するための活動、自分の体験や同じ立場のきょうだいが抱える課題を解決するための話し合い活動がファシリテーターのリードによって複数組み合わせられ、セッションが展開した。

関係づくりゲームは、活発に動いて楽しさを共有する活動が中心であり、最初は、背中につけた洗濯バサミを奪い合うゲーム、ビーンズバッグをファシリテーターのもつ箱に投げ入れるゲームなど個人単位の活動から始まり、数人でグループになり、手をつないで絡み合ったグループを手を離さずに1つの円形になるようにほどくゲーム、3人程度が円になってスカーフを持ち、周りからやってくる鬼にスカーフを取られないように逃げるゲーム、3人グループになり、目をつぶった人が、一方の人が取っているポーズを手で触れて判断し、もう一方の人に同じポーズをさせる彫刻

ゲームというように、小グループのゲームへと進んだ。さらに2つのチームに分かれて、なるべくたくさん風船を突いてゴールに運んで割るゲーム、2チームに分かれて文字を書いた紙を1人ずつ持ち、それを組み合わせてファシリテーターが出す問題に合うなるべく長い単語をできるだけ早く作ることを競うゲーム、さらに全員が1つの円になり後ろの人の膝に座って同時にバランスを取る空気いすゲームというように、集団サイズを徐々に大きくし、仲間意識を高めていく手法を取っていた。

感情や考えを表出するための活動としては、身体を動かす活動として、同胞について自分がとても腹立たしいと思うことを紙に書き、それをくしゃくしゃに丸めてボールにして雪合戦のように投げ合い、終了後傍に落ちているボールを拾って掂げ、読み上げ、そこに書かれていることに同感する人は挙手するというゲーム、1本のロープを自分の感情のスケールに見立てて〇〇の時に同胞が一緒だったら、一方の端が<嫌>で、もう一方の端が<OK>なら、自分の気持ちはどのあたりか実際に立って並び、その理由を話すゲームが取り入れられていた。また、紙に書き込んで考えや気持ちを表す活動としては、セッション導入時に、参加者同士がペアになり互いに相手の強みや弱みをインタビューし合い発表する活動、セッション終結時に、もし「誰かに自分の同胞のことで、一つだけ話せるとしたら、こんなことを伝えたい」とメッセージを書き込んで、読み上げる活動が取り入れられていた。

話し合う活動としては、ファシリテーターが「実は、ある人から手紙を預かっている。悩みがあるらしいので、みんなで解決方法をアドバイスして欲しい。」ともちかけ、封筒を取り出し、参加しているきょうだいの一人にその手紙を読み挙げてもらい、中に書かれた、障害のある同胞に関連して書き手であるきょうだいが直面している悩みや解決したい問題を聞いたきょうだいたちが、自分だったらこうすると意見を出すというものであった。この活動はセッションの終盤で取り入れられ、ほぼ全員のきょうだいが「こんなアイデアはどうか」「自分の時はこうだったから、あなたもそうしてみたら」等と発言した。中には、深刻に考えず視点を変えてプラス面からそれを解釈してはどうかとユーモアを交えた意見を発表するきょうだいもあり、活発なディスカッションが行われた。

デモンストレーションの最後は、今日一番楽しかったゲームのアンコールで、きょうだいたちのリクエストに応じて、空気いすゲームを行い、終了した。

(6) セッションの内容⑤

きょうだいたちを見送った後、参加者がデモンストレーションについての感想を発表し、質疑応答が行われた。その中で Meyer 氏から、ファシリテーターとして活動を進めるためのコツがいくつか示された。1つは、参加しているきょうだいたちの集中力の切れ間を判断して次の活動へと移行するようにし、そのきっかけとしてユーモアやジョークを使って注目させること、他には「ちょっとここに来て」と場所を変えて声をかけ、場面を切り替えるきっかけにしたり、個人的にふざけて活動に集中できないきょうだいに対しては、少し強めに指示をした後「(態度を改めてくれて)ありがとう」とすぐ褒めるコメントを付けることで、参加者の集中力を最後まで持続させながら、活動を進めることが可能になることである。実際にデモンストレーション場面では、Meyer 氏は集合場所を固定せず、部屋の各壁面を背にしたり、中央の広いスペースを利用したりして、いろいろな場所にきょうだいたちを集合させて場面転換をしていた。さらに、どのきょうだいの発言にも必ず、「すばらしい」「いいね」「ありがとう」などの声をかけていた様子が確認できた。2つ目は、どのきょうだいにも同じように声をかけるように心がけることで、平等な発言のチャンスを保障することである。3つ目は、ディスカッションの場で、ファシリテーターを中心に「知恵の輪 (wisdom circles)」ができるようにきょうだいの座る配置を誘導することである。すなわち、ファシリテーターが中心になってきょうだいたちがそれを取り巻くようにほぼ半円を描いて床に座り、次々に手を挙げながら、発言する環境を作る。実際のデモンストレーション場面では、話し合いが進むときょうだいたちが、この知恵の輪を自ら狭めてだんだんファシリテーターににじり寄って、参加度を高めていく様子が確認できた。

さらに、運営上の留意点として、もし子どもがリラックスできるならかまわないが、原則としては保護者が一緒に活動に参加しないほうがよいこと、Sibshop に参加することをきょうだい自身が理解し、納得した上での参加が望ましいこと、同胞の障害種を特定した活動や障害種によって活動を分ける考え方をしないことが挙げられた。最後に筆者が Meyer 氏にファシリテーターが活動を展開するにあたり最も留意すべき点について確認したところ、きょうだいが悪いことでも良いことでも何でも自由に話せる場を保障することであるとの回答であった。きょうだいが自分もまた、大切なヒーローの一人であることを感じられるように支援し

てほしいと締めくくられた。

2. Western New York Sibshop の概要

小学生のきょうだいを対象とした年4回のヤングコースと、10代の中高生を中心とした月2回のティーンズコースの2種類のSibshopが行われている。前者は1回4時間程度の活動で、活動の導入には製作活動を行い、さらに3種類の活発に動き回る遊び、同胞の障害について知るための勉強、ディスカッション、おやつタイムを交互に組み合わせて実施したのち、最後にもう一度製作活動を行ってセッションが終了する。この内容は、Meyer 氏の提供しているSibshopのモデルに沿って設定されている。4回という頻度については、保護者の送迎に負担感がないレベルを検討して決定された。

後者は、ほぼ隔週で日曜日の午後に定期的にミーティングを設け、前者のヤングコースから移行する形で、中高生となったきょうだいたちが継続して参加している。毎回テーマを選定し、それに沿って、ファシリテーターのリードで個々のきょうだいの体験とそれに伴う感情の共有、課題解決に向けたディスカッション等を行うのが中心的活動である。テーマの選定にあたっては、ファシリテーターが参加するきょうだいの関心や、その時々直面している課題を集約する。具体例としては、「スクールバスに同胞が乗ってきたらどういう態度を取るか」「いつも優等生であることを求められることについてどう対処しているか」などである。ディスカッションのほかに、希望に応じて調理などの活動も適宜取り入れている。参加するきょうだい自身も、活動内容の決定に意見を出し、主体的な参加ができるように配慮しており、日本でも広く行われているきょうだい当事者が行う活動への橋渡しのSibshopであると言える。実施場所は、ヤングコース、ティーンズコースともに地域のリソースセンターで、費用は大学の地域支援費、寄付金、及び参加費によってまかなわれる。

Putnam 氏によれば、バッファロー市では地域の問題として、離婚家庭のきょうだいが同胞の面倒をみなければならぬ現状や、多様な人種が集まっており、人種によって家族のアイデンティティに対する考え方の相違があることで、きょうだいの抱える問題がより多様化していることが挙げられた。本Sibshopは、心理学研究室をベースに運営されていることから、支援の観点として、きょうだいの抱えるストレスの問題や対人関係面への関心が高く、Putnam 氏は、7歳とい

う低年齢でありながら同胞の世話を十分やり遂げられないプレッシャーを感じているきょうだいの例を挙げ、Sibshopの目的はきょうだいの感情や社会性、理解等の各側面に働きかけ、その自尊心を高め、自分が家族の中で大切な人間であることを感じられるようにすることであると述べた。

本Sibshopでは、前述したようにファシリテーターは、臨床心理学を学ぶ大学院生が務める。Putnam氏は、スーパーバイザーとして、院生のファシリテーターがSibshopを運営する際のアドバイスとサポートを行っている。ヤングコースでは、15名のきょうだいに6名の院生、ティーンズコースでは2名の院生が対応している。彼らは、全員先に示したSibshopファシリテータートレーニングを受講しており、その他に、カウンセリングとソーシャルワークのトレーニングを受けている。

IV. 考察

1. Sibshopファシリテーターが果たす役割

トレーニング内容から、ファシリテーターが果たすべき役割は、きょうだいに対して直接行うプログラムの企画立案実行のほかに、地域におけるきょうだい支援のニーズのリサーチ、予算の確保、家族を始め関係者との連絡調整、会場やスタッフの確保など多岐にわたることが分かった。その概要は、以下の3つの領域に分類できると思われる。

(1) きょうだいへの直接支援者としての役割

きょうだいのよき理解者、そしてプログラム実践の責任者として、きょうだいのニーズを踏まえて、適切なねらいと活動内容を設定し、ひとまとまりの活動プランに作り上げ、それをベースに実際に活動を行う集団活動のリーダーとしての役割が期待されている。同時に適宜、個々のきょうだいに個別に対応するカウンセラー、ソーシャルワーカー的支援をする役割も含まれている。

(2) きょうだいを取り巻く支援環境整備推進者としての役割

アメリカでは既にきょうだい支援が公的な支援事業として位置付けられており、効果的な事業展開のため、ファシリテーターは、参加者の募集、スタッフの養成、場所と予算の確保等にかかる業務等、実現に向けた環境整備を行う役割を持つ。さらに、きょうだいの保護者や家族を含め、きょうだいを取り巻く人々に対して、ニーズの掘り起こしや理解啓発活動を行う役割が期待されている。

(3) Sibshop発展プログラム開発者としての役割

Sibshopは、小学生を対象とした基本形が確立し、それに基づいて、きょうだいの育ちや地域の実情に即して、各地でアレンジされ実践されてきている。ファシリテーターは、Sibshopの基本理念に基づきながら、きょうだいの多様なニーズに応じて、さらなる効果的なスタイルと方法を開発し、Sibshopを実現していく役割が求められていると考える。

2. Sibshopファシリテータートレーニングに見るファシリテーターに求められる資質

まず1点目として、多角的な視点からきょうだいのおかれている現状とニーズを把握・理解できることである。トレーニングでは、「心配事・気がかり」と「可能性・機会」の2つの対極から整理していたが、その中でなるべく多様な意見を持つこと、さらにステレオタイプに善し悪しを判断するのではなく、きょうだい一人ひとりの育ちの歴史や、家庭環境、きょうだい本人の考え方や感じ方の個別性を踏まえたありのままの理解と、本人の視点に立った状況の把握ができることが求められていた。

2点目は、上記とも関連するが、きょうだいの育ちについて、多様な価値観を持って支援の方向を柔軟に判断できることである。Meyer氏はSibshopの目的の一つとして、きょうだいであることの喜びに着目することを奨励している。ファシリテーターは、問題解決的な価値観や思考に偏らず、きょうだいの置かれている状況を積極的に評価し生かしていく視点を含めて、プログラム運営ができることが求められる。すなわち、きょうだいの在りようを1つの方向性に結び付けるための支援ではなく、個々のケースに応じて、きょうだい自身が判断し、自分にとって良いと評価できる行動を自尊心を持って主体的に選びとれるようになるための支援を企画、実現することが求められていると考える。

3点目として、きょうだいが安心して何でも話せると感じられる場作りのための配慮ができることである。デモンストレーションでは、初対面のMeyer氏に対し、きょうだいたちは進んで発言し、長時間の活動でも集中が途切れることがなかった。そのためには、活動の組み合わせや展開順序などの計画の他に、実際の展開においてきょうだいの参加度を把握して、柔軟に含まれる活動の時間や順序を調整したり、空間を活用したりする臨機応変な対応が必要であった。このように、ファシリテーターは参加するきょうだいの状態を的確に判断し、個別対応のみによるのではなく、集

団活動を十分に体験させ、それを柔軟に運営することで、きょうだいの自己開示を促進できるテクニックを持つことが求められる。

4点目として、きょうだいの支援にかかわる多様な立場の人々とのコミュニケーションができることである。Sibshopの運営には、当事者のきょうだいだけでなく、その保護者のニーズ、地域のニーズ、さらには資金提供者が考える支援のねらいなどを総合的に組み込む必要がある。Sibshopは単発的なイベントとして実施するのではなく、継続することで効果が期待されるものであり、先の2点目で述べたようなきょうだい自身の育ちを実現するためには、これらの人々との連絡調整によって、関係者に活動の意義が十分理解されて、継続が可能となるようにすることが重要となる。特に、公的な支援活動として資金提供を受けて行われるSibshopにおいては、地域の人々に活動の意義と評価を理解してもらうための工夫が求められる。

3. Western New York Sibshop に見るファシリテーターに求められる資質

1点目に、地域社会に根ざしたSibshopを展開するファシリテーターとして、その地域ならではのきょうだいを取り巻く課題を踏まえて、活動を構成できることである。Putnam氏が指摘するようにWestern New York Sibshopが行われているバッファロー市は、ニューヨーク州第2の都市として人口も多く、多様な人種で構成されている。一方、先に述べたファシリテータートレーニングが行われたジェームズタウンは公共交通機関が限られるような小規模都市である。両者では、きょうだいを取り巻く環境は大きく異なり、当然Sibshopのねらいや運営形態にも違いが見られる。地域の家族形態や家族に対する価値観の相違を理解した上で、ニーズを把握し、支援の目的と内容設定を行うことが求められる。

2点目に、継続した地域支援活動として位置付けるため、きょうだいの年齢に応じた活動をアレンジできることである。Western New York Sibshopでは、小学生向けの典型的なSibshopのほかに、それを卒業した中高生のきょうだいのための定期的な活動が設定され、ファシリテーターは、将来に向け、きょうだい自身の自主的なミーティング運営を促すための橋渡し役、きょうだいが現実の課題と向き合うための伴走者として、きょうだいたちと相談しながらミーティングを運営していた。そのためには、カウンセリングやソーシャルワークの技能をもつことが必要となる。

Meyer氏の運営するThe Sibling Support Projectにおいても、10代のきょうだいたちのネットワークとして、SIBTEENというフェイスブックが運営され、世界各国の10代のきょうだいのコミュニケーションの場として利用されているが、このように、子どもから大人に至る長期的な視点に立って、それぞれの時期のきょうだいの育ちに応じて、必要な支援を想定・企画し、実現する力が求められる。

V. まとめと今後の課題

調査の結果、Sibshopにおけるファシリテーターに期待される役割として、①きょうだいへの直接支援者としての役割、②きょうだい支援環境整備推進者としての役割、③Sibshop発展プログラム開発者としての役割が考えられ、さらに資質の要件として、①きょうだいの経験と現状に対する多角的な理解ができること、②課題解決的な視点のみならず、きょうだいであることの積極的評価に基づくきょうだいの自己実現に向けた長期的な支援のビジョンを持つこと、③きょうだいの安心と自己開示への意欲を高めるための豊富なバリエーションの活動内容の選択と柔軟な活動展開ができること、④Sibshopの継続的な実施を可能とするきょうだいとそれを取り巻く家族、地域関係者とのスムーズなコミュニケーションができること、⑤その地域ならではのきょうだいを取り巻く課題を踏まえて、活動を構成できること、⑥きょうだいの生涯にわたる支援を継続する視点から、きょうだいの年齢に応じた活動をアレンジできることの6点があることが示唆された。今回得られた知見はSibshopファシリテータートレーニングの体験調査と1事例の実践者の聞き取り調査に基づくものであり、ファシリテーターの資質要件の一部であると考ええる。実際にSibshopを運営しているファシリテーターの複数事例の調査や、参加したきょうだい、関係者の評価等から、ファシリテーターの役割とそれを果たすための資質について、さらに知見を広げる必要があるだろう。

また、今回の調査では、トレーニング内容において、きょうだいと親との関係支援については、具体的なプログラム作成には含まれておらず、ファシリテーターの役割としても「親に対して、きょうだいに関する理解を促進するための情報提供をする」こと以外には明確化されていなかった。親は活動を妨げないならSibshopsに参加可能として、むしろきょうだいの活動そのものから切り離して考える方が良いとコメントされていた。このようにSibshopでは、親自身は直接の

支援の対象ではなく、きょうだい支援の必要性の理解者として位置付けられていることが分かった。しかし我々の調査では、きょうだいの親子関係の課題は、きょうだいの適応や育ちにかかわる問題であることが示唆されており（阿部・神名 2012、阿部・水野 2012、水野・阿部 2012）、きょうだい支援プログラムを検討する際には、親への支援を含めて、親子の関係そのものを育てていくための視点が必要であると考えられる。このような課題は、日本人の家族観を背景として、クローズアップされる問題なのかもしれない。さらに Meyer 氏は、筆者に対し、日本における自身のライブデモンストレーション経験から、集団活動のオープンな場では、日本の小学生きょうだいが自己主張や自己開示をためらう傾向が見られた点を指摘し、日本における欧米型 Sibshop 実践上の課題であることを示唆している。これらのことから、我が国の文化的背景やきょうだいの育ちに根ざした独自のプログラムが開発や、ファシリテーターの役割、求められる資質についても、さらに検討していく必要があると考える。

謝辞

本調査にあたり、The Sibling Support Project 代表 Don Meyer 氏、The Resource Center of Chautauqua County 所長 Paul Cesana 氏、同 Director Tess Kersner 氏、Chautauqua Tapestry Youth Engagement Specialist Victoria A. Patti 氏、Canisius College Susan K. Putnam 教授に多大な協力をいただいた。ここに改めて感謝申し上げる。

資料

- <http://www.siblingsupport.org/>
- Sibling Support Project Workshop Description (The Sibling Support Project 配布資料)
- Sibshop Standards of Practice (Sibling Workshops and Sibshop Facilitator Trainings 配布資料)
- The Demonstration Sibshop Packet (同上)
- Sibshops: Getting Started! (同上)
- The Resource Center of Chautauqua County 事業案内
- <http://resourcecenter.org/>
- Western New York Sibshop 2011-2012 (Sibshop at Canisius College)

文献

阿部美穂子・神名昌子(2011)障害のある子どものきよ

うだいを育てる保護者の悩み事・困り事に関する調査研究. 富山大学人間発達科学部紀要第 6 巻第 1 号, 1-9.

阿部美穂子・神名昌子(2012)障害のある子どものきょうだいのインフォーマルサポートに関する調査研究. 富山大学人間発達科学部紀要第 6 巻第 2 号, 99-112.

阿部美穂子・水野奈央(2012)発達障害のある子どものきょうだい児に対する教育的支援プログラムの開発と効果の検討—小グループによる実践から—. とやま発達福祉学年報第 3 巻, 3-20.

平川忠敏(2004)自閉症のきょうだい教室, 児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 372-379.

平山菜穂・井上雅彦・小田憲子(2003)発達障害児のきょうだいの心理的支援プログラムに関する研究(1). 日本特殊教育学会第 41 回大会発表論文集, 692.

井上雅彦・平山菜穂・小田憲子(2003)発達障害児のきょうだいの心理的支援プログラムに関する研究(2). 日本特殊教育学会第 41 回大会発表論文集, 693.

川上あずさ(2009)障害のある児のきょうだいに関する研究の動向と支援のあり方, 小児保健研究, 68(5), 583-589.

Meyer, D. J. & Vadasy, P. F. (2008) Sibshop: Workshops for siblings of children with special needs Revised Edition. Paul H. Brookes, Baltimore, Maryland.

Meyer, D. J. (2012) Sibling Support Project Workshop Description. The Sibling Support Project. (再掲)

水野奈央・阿部美穂子(2012)発達障害のある子どものきょうだい児に対する教育的支援プログラムの開発と効果の検討(2)—実践に対する保護者評価から—. とやま発達福祉学年報第 3 巻, 43-54.

西村辨作(2004)発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題、児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 344-359.

吉川かおり・白鳥めぐみ・諏方智広・井上奈恵・有馬靖子(2009)きょうだい支援の実践を拡げていくために 3、特殊教育学研究, 46(5), 339.

附記

本調査研究は、平成 24 年度科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号 24531241「障害のある子どものきょうだいとその家族の QOL 支援プログラムの開発」(研究代表者 阿部美穂子)の一部として実施したものである。